

リストにおける啓示の基盤を弱めることなしに、それをなしているのである。彼にとっては、この「いかに」がたとえこの世界の諸制度に関わっている時でさえも、キリストの本来の姿は破壊されていないということ、なぜなら「だれか」という問いの光の下で正しく理解されるとき、すべての制度はキリストから生じ、キリストにおいて全うされるということが明らかになることが極めて重要な意味をもっていたのである。

この確信に立って、ボンヘッファーはイエス・キリストにおいて神から来る戒めは、すでにイエス・キリストの人格において、彼の代理の業を通して成就されていると主張する。倫理は常に神の言葉とキリストの業の中に基礎づけられており、他者のために身代わりになるというキリストの代理の業に参与することによってその完成を見る、と彼は考えるのである。

それゆえボンヘッファーは、倫理の目指す方向を次のように言い表わしている。

「キリスト教倫理の根源は、自分自身の我の現実でもなく、またこの世界の現実でもなく、また規範や価値の現実でもなく、イエス・キリストにおいて自らを啓示したもう神の現実である。このことがキリスト教倫理の問題に関わりを持つとするすべての人に対して他の何事よりも先に必ず課せられなければならない要求である。この要求は、われわれに対して最後の決断をうながすところの一つの問いを提出する。すなわち、それはわれわれは人生においていかなる現実を考慮に入れようとしているのか、神の啓示の言葉の現実か、それとも地上の不完全な現実なのか、あるいは、復活か、死か、という問いである¹⁷⁾。

次に、ボンヘッファーの教会と世界についての理解が注目されねばならない。

ボンヘッファーは、明確に教会をイエス・キリストの戒めに対する新しい服従へと呼び出している。彼は福音的神学の基礎に立って、良き行為について語ることを躊躇しないのである。ボンヘッファーは神の言を聞くことによって確立された共同体は、その生涯をキリスト自身の生涯に形どら

ねばならず、それゆえにキリストの形にかえられることを教会に勧めるのである。教会にとっては、正しい神学、深い聖書理解、厳かな典礼が行われているというだけでは充分ではなく——ボンヘッファーはこれらの重要性を否定するのでは決してないが——そこにおいてキリストへの服従が行われていなければならないのである。この場合、服従は二つの領域、すなわち第一に信仰共同体としての教会の内的生活において、第二に世俗世界に散らされた教会員の生活においてなされねばならないのである。

ボンヘッファーは「この世的」キリスト教という概念に対して新しい根拠を与え、ここにおいて神とこの世の関係に関する新しい理解を教会にもたらす助けをなしたのであるが、これはボンヘッファーのなした貢献の最大のものの一つであり、彼の思想はキリスト教信仰の理解に重要な転回を導くことを可能にしたのである。彼は概念として神を知るのではなく、この世の具体的な生活の中で、他者と具体的に出会うことにおいて、またそのことを通してのみ神を知るのであると主張する。神は他者のために存在する人間としての人間の形においてのみ知られるのであり、神の全能、全知、遍在の唯一の基礎は、死にいたるまで保たれた自己からの自由にある、と主張するのである。

したがって、ゴッドシーはボンヘッファーの神学を、委託 (commitment) と包まれること (involvement) の神学である¹⁸⁾と定義づけているが、これは正しいであろう。ボンヘッファーにとって、真のクリスチャンであるということは、この世の生活の仕方に身を委託することであり、またそこに包み込まれることである。そしてこれがイエス・キリストにおいて啓示したもう神の独自の仕方なのである。この事は、この世界に対するいかなる傍観者の態度や、奉仕に対するいかなる慣習的、あるいは知覚的な接近をも拒絶するのである。かくして教会は、神の根源的な関心はこの世界にあることを、あらたに学ばねばならない。他者にのみ関心を向けられたイエスの存在に与ることによって、教会は世界において、新しい

17) Ibid., S. 202.

18) J. Godsey : The Theology of Dietrich Bonhoeffer p. 281 参照。